

書評: 『中国残留孤児の社会学—日本と中国を生きる三世代のライフストーリー』

蘭信三、上智大学

張嵐『日本残留孤児の社会学—日本と中国を生きる三世代のライフストーリー』、青弓社、2011年、316ページ、ISBN978-4787233295

戦前期「満洲国」には約155万人の日本人が居住していたが、そのほとんどは第二次世界大戦の敗戦に伴って日本に引揚げてきた。しかし敗戦前後の混乱時に様々な経緯から中国人の養子や妻となり、日本人の総引揚げ後も中国に残った約1万5千人の日本人がいた。前者を中国残留日本人孤児、後者を中国残留日本婦人という。本書が対象とする中国残留孤児の9割は、日中の国交正常化後の80年代から90年代にかけて日本へ帰国してきた。

中国残留孤児は、「満洲国」から新中国へ、改革開放期の中国から高度成長後の日本へという数度の越境を経験した人たちで、80年代以降マス・メディアでも、小説や映画でも、そして人文・社会科学的研究においても注目されてきた。日本では、中国残留孤児は戦争によって「引き裂かれた家族」や「戦争孤児」などの悲劇的イメージがメディアで形成され、研究はそれを踏まえつつも日本への帰国過程、帰国後の適応過程、日本社会における包摂と排除の状況などが注目されてきた。他方、中国では残留孤児の前半生、とりわけ中国人養父母や中国の地域社会における彼らの残留経緯や人道主義的な受け入れ状況についての研究が蓄積されてきた。日中の双方が自国を舞台とした研究を中心とし、往々にして他方への視野を欠くものとなりがちであった。そのなか、張嵐はその傾向を軽々と乗り越えてきた。

日本で学んだ張嵐は、日本研究者のなかでも飛びぬけた日本語能力を持つだけでなく、国民国家の大きな物語に囚われることなく、聞き取りの場で語られる小さな物語や、語りのなかの多声性や矛盾を感受する力でも際立っていた。張は日中の先行研究を丁寧に読み取り、日中両言語を駆

使して幅広くインタビューを行い、先行研究の困難を克服してきた。何よりも、張の幸運は、当時日本で確立されつつあった対話的構築主義という方法を、その提唱者である桜井厚に直に学び、その下で研究を推進できたことにあった。

桜井が提唱するその手法は、語り手の一生を対象とし、語り手との「対話」からその生活世界をアクティブに聞き取り、彼らの微細な生活世界に迫る方法である¹。張はこの方法の真髓を効果的に生かしただけでなく、中国文化を原点とする残留孤児やその関係者にはその母語である中国語で聞き取り、他方で日本のボランティア団体や行政には日本語でのインタビューを重ね、言語的問題等からなかなか進まなかった双方への聞き取りに成功した。しかも、日中双方で生きてきた（生きている）中国残留孤児、日本で生きる残留孤児二世、中国の養父母という三世代への聞き取りを実現した。張の聞き取りを中心とするフィールドワークは、日中を越境して構成される残留孤児の生きられた生活世界をバランスよく対象としており、先行研究の方法のなかに潜んでいた対象の偏りはもちろん、ややもすれば陥りがちなナショナリスティックな面をも克服することに成功した。

張の最大の貢献は、残留孤児に関わる三世代へのライフストーリー・インタビューから残留孤児をめぐる多様な経験や想いを詳細に描き出した点にある。(a)日本に帰国し苦闘する残留孤児、(b)中国で生きることを選んだ残留孤児、(c)残留孤児でありながら帰国できない少数の人びと、(d)残留孤児二世といった、二世代にわたる様々な越境経験とその違いから生じる多様なアイデンティティを描き出した章はじつに興味深いものとなっている。

従来の研究は、(a)タイプで残留孤児を代表させ、その歴史性から日中の狭間でアイデンティティ・クライシスに悩む人たちというモデルストーリーが構築されてきた。これに対して張は、彼女ら彼らのなかにある両義的自己、柔軟な自己、定着した自己という多様で、複数のアイデンティ

¹ 桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2007、pp.28-30.

ティを提示した。すなわち、日本人であるというアイデンティティを持ちながらも、日本社会から排除されることによって中国人というアイデンティティを構築せざるを得ないという従来の両義的自己に加え、相互行為のなかで肯定的に自己を日本人とも中国人とも表現する柔軟な自己、中国人という確固たる自己アイデンティティを表出する定着した自己、といった多様性を明らかにする。さらに、(d)残留孤児二世のアイデンティティについても、「日本人でも中国人でもない」という否定的アイデンティティだけでなく、「日本人でも、中国人でもある」という肯定的なアイデンティティをも描き出す。

張は、語りを解釈するのではなく、「語りによって語らせる」という桜井の手法の持ち味を生かす丁寧な聞き取りから、日中という二つの祖国に引き裂かれた人生や、ふたつの国の狭間で揺れるアイデンティティという悲劇性が強調されてきた従来のドミナントな物語に対し、もうひとつの、積極的で肯定的なアイデンティティを描き出すことで、中国残留孤児の多様で、肯定的な生き方をも照らし出した。これは、張ならではのインタビュー、フィールドワークの賜物であり、中国残留孤児研究に貢献したと言えよう。

さて、従来のドミナントな物語の形成は、日本人研究者は植民地支配や日中戦争への反省とある種の贖罪から、中国人研究者は「偽満」という中国社会の歴史観から、ネガティブなアイデンティティがクローズアップされてきた。というのも、歴史認識問題、ナショナリズム、そして裁判闘争等と密接に関連するテーマに関する聞き取りは、どのような言語やどのような状況で聞き取られたかという「語りの場」や、裁判の状況やそれに関する世論動向や両国のナショナリズムの状況などという社会的文脈、言い換えれば「語りの磁場」によって強く規定されがちであり、聞き手も語り手もそこから逃れることは簡単ではないためである。だが張は双方の解釈の背景にあるものを了解しながらも、それとは異なるポジショナリティから、このような柔軟で肯定的なアイデンティティの語りを聞き取り、残留孤児の「アイデンティティの複数性」を掬いとった。これは、両言語での聞き取りとともに、国家の歴史観やナショナリズムから比較的自由的な考察から得られたものと思われる。

本書が明らかにした残留孤児の「アイデンティティの複数性」は、張の明るくて前向きな人柄、日中両言語を駆使する語学力、そして彼女の絶妙なポジショナリティの賜物であろう。本書は、中国残留孤児の新たな側面を明らかにしただけでなく、このような難しいテーマへのライフストーリー・インタビューの在り方を教えてくれる、ひとつの範例となっている。